

やっと秋だと思っていたら、もう11月ですね。去年は11月の肉相場が一番高かったですけど、今年はどうでしょうね。さて今月から、いよいよ導入から月齢ごとの管理のお話に入ります。まず最初の今月は、導入牛の選び方、そして導入時の衛生管理のお話からいきますね。

どんな子牛を選ぶか？

みなさん、それぞれ好きなタイプの子牛というのがあると思います。自分の惚れた子牛の方が愛せるし、大切に育てることが出来ますから、最終的には好きなタイプの子牛を選ぶのがよいのでしょうけれど、競馬でも惚れた馬で損ばかりしてる人もいますからね。とりあえず、どんな子牛がもうけさせてくれるかを考えてみましょう。まず、しつこいようですが、「肥育牛はロースもサシも第一胃で作る」訳ですから、第一胃の発達した子牛を選ぶのが最優先ですね。きちんと粗飼料で飼い込んである子牛は、肋バリがよく腹囲も大きいです。ただし、おなかがヒョウタンのように下の方ばかりふくれて垂れ下がっているような子牛は避けた方がよいです。一見腹作りがよいように見えますが、こういう下垂した胃袋は、発酵が悪くサシの素がうまく作られないだけでなく、慢性ガスや慢性下痢になりやすいです。おなかが小さい子牛は、食欲もあまり増えてくれませんし、筋肉の素になる菌体タンパクやサシの素になるVFA(揮発性脂肪酸)を作る力が少ないのです。また無理に詰め込むとルーメンアシドーシスとかアンモニア中毒なんて病気にもなりやすいです。おなかが丸くて大きい子牛を選ぶようにしましょうね。

次に骨格のしっかりした子牛。肥育牛の餌は、どうしてもカルシウム不足になりやすいので、肥育牛は育成期に骨に蓄えたカルシウムを少しずつ溶かして使っていくのです。カルシウムというと骨の成分としての働きが有名ですが、実はカルシウムイオンとして神経の調節や筋肉の収縮に大切な働きをしています。血液中に10mg/dl程度ないと牛さんはうまく生きていくことができないのです。ですから、もし骨格のもっとも発達する子牛の時期に骨格がしっかり作られていないと、骨から溶かして使うことができるカルシウムが少なく、すぐカルシウム欠乏に陥ったり、骨がもろくすぐに骨折したりするので、骨格のしっかりした子牛の見分け方ですが、体高ができていることと肋バリ(腹おき)のよいことです。タンパク質とカルシウムをしっかり摂っていないと体高はできませんし、子牛は良質のタンパクとカルシウムを粗飼料から摂取するので、骨格のよい子牛は粗飼料の摂取量も多く、自然と肋バリもできるのです。

それから大切なことは、決して尾枕の大きい子牛を選ばないことです。尾枕ってご存じですか？しっぽの付け根の両側にふわふわした脂肪のかたまりがついている子牛がいるでしょ？あれです。あれは腹腔内脂肪(おなかの中の脂肪)の量と比例するので、ですから尾枕の大きな子牛は腹腔内脂肪がたくさんついていることになります。脂



肪というのは余分な栄養の貯蔵庫ですよ。肥育牛は、たくさん食べて余分な栄養(カロリー)を筋肉内脂肪(いわゆるサシ)に蓄えることを目指しています。ところが、余分な栄養分の貯蔵庫がおなかの中にいっぱいあったら、サシまで余分な栄養が回りませんからサシが増えてくれません。尾枕と腹腔内脂肪は6,7ヶ月齢から9ヶ月齢くらいの時期に発達しますから、セリに出す前に育成農家さんが濃厚飼料などを与えすぎて化粧肉で太らせてしまうと尾枕も腹腔内脂肪も大きくなってしまいます。育成農家さんの中には、太った子牛の方が高く売れると信じている方もいますからね。

これまでの話を総合すると、見た目では体高がありお腹が丸く大きいこと、そして脂肪太りではなく筋肉質ですっきりした牛、ということになります。

それから子牛の毛にも注意しましょう。被毛失沢というのですが、毛づやがなく毛がボサボサしている子牛では、寄生虫がいる場合や金属異物を飲み込んでいる場合があります。またおしりの周りが禿げた後の見られる子牛の場合、以前にロタウイルスやサルモネラ菌に感染した可能性があります。この場合、特にサルモネラ菌では、病気が治ってもしつこくばい菌をウンコのなかに出す場合があって、自分の農場をサルモネラ菌だらけにしてしまう可能性があるのです。それから蹄の付け根やお腹の下の方がまばらに禿げている場合、乳頭糞線虫という恐ろしい寄生虫が感染している可能性があります。いずれにしてもハゲには注意！ということですね。

あと皮膚病なんかは軽く考えがちですが、白癬(白く円形にかサブタができる皮膚病:真菌の感染で起こる水虫やタムシのなかま)が体中にできているような子牛は、慢性肺炎などで免疫が低下している場合があります。それにあれて人間にも移りますからね。もちろん牧場の他の牛にもうつまくりです。用心用心。どうしてもそういう子牛を導入する場合には、自分の農場に入れる前に薬を塗っておきましょう。塩化ジデシルジメチルアンモニウムが入った消毒薬(クリアキルとかロンテクト、アストップなど)を40 くらいのお湯で溶かして塗ってやるとよいでしょう。治りにくい場合には、人間の水虫の薬がよく効きます。ダマリンとかブテナロックとかね。

あとはできるだけ似たようなタイプの子牛をそろえることができれば、その後の肥育も同じ餌で同じタイミングで飼っていけるので楽だし成果が出やすいです。系統をそろえるのが一番いいのですが、なかなかそうはいきませんもんね。ですから少なくとも贈体型でそろえとか、肉質系でそろえとか、そのくらいは考えていきましょう。それと月齢があまり離れた子牛を一緒に飼うと、濃厚飼料の打ち込みとかを同時にやりにくいし、仕上がり均一ににくいです。このあたりもそろえた方が無難でしょう。

さて次は導入時の衛生対策ですが、あれっ?もうページがない?では来月は導入時の衛生対策からお話ししましょう。(ABさん、1年で終わるか心配になってきたよ。ごめんなさい。何とかがんばります。)

